

往復書簡

今回からは、株式会社麦わら農場の青木理紗社長と当機構理事長の高木勇樹の往復書簡が始まります。青木社長は、経営コンサルタントを経て農業生産法人を設立。現在は自社生産農産物を使用したお弁当を映画などの撮影現場に届けるケータリング事業にも取り組む女性農業経営者です。

拝啓 高木勇樹様

桜も散り、春らしい快晴が続いておりますが、いかがお過ごしでしょうか？お変わりなく精力的に活動されているかと想像しております。いつも淡々と新しく物事に取り組まれる姿勢にいつも元気をいただいております。私の方も相変わらずばたばたと楽しく日々を過ごしております。

今から考えると高木様とのご縁も深く、思い返せばもう十年前になりますでしょうか。私が前職のコンサルティング会社に所属していた時に、初めて農業について興味をもったきっかけの農業プロジェクトにも高木様が顧問としてはいらっしゃいました。

そのプロジェクトを通じて様々な農業者の方々にお話を聞く機会をいただき、日本の農業が「農協から資材を購入し農協に生産物を販売する」そのビジネスモデルによって「利益が少なく多くの農業者が辞めていっている」という日本の農業に関する現状を初めて知りました。ビジネスモデルの改革が叫ばれている時代になんと遅れた産業なのか、そして生きることの基礎となる食というものがおそろかになっていることに衝撃を受けたものでした。そして何よりも自分が大卒に行きながらそういった現状を全く知らなかったし、知る機会もなかったこと、そして一日に三食食べながらその基礎がどうなっているか全く興味を持たなかったことに愕然としました。これをきっかけに日本の農業を何か変えたい、と考えたことは今も私が農業に関わる原点となっております。その後紆余曲折ありましたが、やはり自分がやりたいことに向き合おうということで、五年後に農業生産法人を立ち上げ、農業・化学肥料を使わない農法で生鮮作物の生産を始めました。これを通じて、生鮮野菜が作られるまでに時間が

かかること、天候のリスクが高いこと、その結果安定的な販路を見出すのがとても難しいこと、且つ在庫リスクが高く作る前に販路を見つけるのが困難であることを身をもって経験しました。農協に生産物を販売する農業のスタイルを続けることに意味があることをとても痛感しました。

生産の技術が低い弊社では既存の規格にあった作物を十分に作りきれない中、利益率を上げ販路を確保するためにお弁当・ケータリング事業を始めたのはもう四年前になります。現在徐々に販路を広げており、「安定的な利益を確保することを通じて継続的な農業を実現する」「体に良い食を手軽な形で消費者に届ける」という私の目標は少しずつ実現されてきているのかな、と自分では思っているところでございます。

また現在の詳細については次の手紙にてご報告できればと思っております。

敬具

平成二十七年四月吉日

青木 理紗（あおき りさ）

一九八〇年 東京都生まれ
二〇〇三年 東京大学文学部を卒業後、アクセンチュア株式会社に入社。経営コンサルタントとして活動。
二〇一〇年 農業生産法人株式会社麦わら農場を設立し、代表取締役として農業経営を開始。



拜復 青木 理紗 様

お便りいただいたのが、関東の桜も散り終えた四月。季節の移り変わりは本当に早いものです。長いと思った連休も終わり、風薫る五月、桜の若葉も日毎に緑を濃くしています。

また今年には例年になく台風の発生が早いようですね。五月中旬で既に七号。この先の天候が心配ですね。

五月を迎え、麦わら農場のお仕事も多忙を極めているのではないのでしょうか。

青木さんと初めてお会いしたのは、青木さんがコンサルをされていた農業プロジェクトの時ですから、もうひと昔も前のことです。

このプロジェクトに私が関わることになったのは、話せば長くなりますが、このプロジェクトを主導されていた企業のトップと日本農業の改革を論議する研究会でお会いしたのがきっかけでした。

人と人とのつながり、ご縁は何かを触媒として次から次へと広がっていくのだと思います。加えて、青木さんがこのプロジェクトを通じて日本農業の現実、目を向けられ、自ら飛び込んで実践されてしまう、その決断力、行動力にただただ感服です。余程豊かな感性に支えられたし、っかりしたものでさしをお持ちなのだと思います。

ただ現実には筆舌に尽くし難いご苦勞の連続であったろうと思います。長年農業に取り組んだ者でも厳しいとされる農薬・化学肥料を使わない農法に挑戦されたとのこと、まわりの農家からいろいろ言われたであろうことは想像に難くあ

りませんが、泣き言ひとつ言わず、初志貫徹にまい進されるその気概・エネルギーはどこから生まれるのでしょうか。私は私で青木さんのその姿勢から元気をもらっています。

試行錯誤の中、農場設立の原点(目標)を実現しつつある。私の所謂「持続的農業経営」の地歩を固めつつある。

その小さくてもキラリと光る農業経営を、そして青木さんのこれまでの取組みをビジネスモデルとして確立して欲しい。

次回、「現在の詳細」をお聞きする中で、私自身も考えたいと思います。

敬具

平成二十七年五月吉日

高木 勇樹 (たかぎ ゆうき)

一九四三年 群馬県生まれ
一九六六年 東京大学法学部卒業後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官など歴任。
一九九八年 農林水産事務次官、二〇〇一年退官
二〇〇二年 ㈱農林中金総合研究所理事長
二〇〇三年 農林漁業金融公庫総裁、二〇〇八年同公庫退任
二〇〇七年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長
現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事長などの立場から、わが国農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力。

